

幼児期の子育てにおける親の省察機能・養育行動が、 子どもの問題行動・親の精神的健康に与える影響

—父母ペアデータを用いた縦断的検討—

The Impact of Parental Reflective Functioning and Parenting Behavior Raising Toddler's on Children's Problem Behavior and Parent's Mental Health:

Longitudinal Study Using Father-Mother Pair Data

勝 山 幸

Miyuki KATSUYAMA

(日本女子大学大学院人間社会研究科 心理学専攻博士課程後期)

要 約

本研究の目的は、幼児を育てる父母の省察機能と養育行動が、子どもの問題行動と父母の精神的健康にどのような影響を及ぼすのかについて、2時点データを用いて縦断的に検討することであった。103組の父母ペアデータにおける個人内・個人間の影響プロセスを識別し、その関連について交差遅延モデルを用いて経時的に分析した。分析の結果、父母の養育行動は、1年後の子どもの問題行動と父母の精神的健康に関して、自身だけではなくパートナーにも影響を与えていた。これに対して父母の省察機能は、1年後の子どもの問題行動に関しては自身のみに影響を与えていたが、父母の精神的健康に関しては自身だけではなくパートナーにも影響も与えていた。これにより、省察機能のような養育行動の背景にある認知的枠組みが、父母自身だけではなくパートナーの精神的健康にも影響を及ぼす可能性が示唆された。

[Abstract]

The purpose of this study was to examine longitudinally, how reflective functionings and behaviors of parents raising toddlers affect their children's problem behaviors and parents' mental health. 103 parent pair data were used to identify intra- and interindividual influence processes and their associations were analyzed using cross-delay models. The results showed that parenting behavior affected not only themselves but also their partners in terms of their children's problem behavior and their mental health. In contrast, parental reflective functioning affected not only themselves but also their partners in terms of their mental health, although it affected only themselves in terms of their children's problem behavior. This suggests that the cognitive framework behind parenting behaviors, such as parental reflective functioning, may influence not only the mental health of the parents themselves but also their partners.

問題と目的

子どもの社会的・情緒的発達にとって早期の養育関係の質は重要である。子どもは生まれつき苦痛に直面した際に情動を回復させる力を持っているわけではなく、怯えたり圧倒されたりしたときには情動調整を助けてくれる親を頼りにする。この二者関係のプロセスを通して、子どもは徐々に情動の自己調整を学ぶ (Trevvarthen et al., 2006)。この際、乳幼児期の子どもは自身の感情を

適切に言葉にすることはできないため、子どもの行動や様子から、言葉にされない感情を推察する親の能力が重要になる。これは、親の省察機能 (Parental Reflective Functioning) と呼ばれ、アタッチメント対象者との間で発達するメンタライジング能力の機能により説明ができる。

1. メンタライジングと省察機能

メンタライジングとは、人の行動の基底にある心理状態 (考え, 感情, 欲求, 願望, 確信) について認識することである (Fonagy & Target, 1997)。メンタライジングには2つの次元 (黙示的/自動的) (明示的/制御的) があるとされ (上地ら, 2021), 日々自動的に進行し, 特に意識的に考えなくても, 相手の表出に基づいて人の心理状態を推察することは, 黙示的/自動的なメンタライジングの次元に基づく処理である。一方, 緩慢ではあるがより注意深く慎重に原因帰属を行い, 自分の即時的反応が妥当とみなせるものなのかを考慮することは, 明示的/制御的なメンタライジングの次元に基づく処理である。こうした明示的なメンタライジングは自己と他者の心の状態について一旦立ち止まって省察する意識的な能力であり, これを省察機能と呼ぶ。親の省察機能は, 子どもの主観体験に関心を寄せ, 子どもの行動を根底にある心理状態の観点から解釈することによってその行動を意味づける親の能力とされる (Fonagy & Target, 1997)。敏感な養育の根底にはメンタライジングがあり, 親の省察機能が高いほど否定的な養育行動が少ないことが示されている (Ensink, et al. 2016; Suchman, et al. 2010)。

2. 親の省察機能の測定と先行研究

親の省察機能を測定するための尺度として, Luyten et al. (2017) の PRFQ (The Parental Reflective Functioning Questionnaire) が, これまでに多くの国で翻訳され使用されている。PRFQ は 0 ~ 5 歳の子どもの親を対象とし, 親の省察機能の主要な3つの要素 ①非メンタライジングモード (Prementalyzing Modes; PM) ②子どもの精神状態についての確信 (Certainty about Mental States; CMS) ③子どもの精神状態への興味・関心 (Interest and Curiosity in mental states; IC) を因子として構成された自己評価式尺度である。省察機能の高さは子どもの精神状態への興味・関心 (IC) の高さによって示され, メンタライジングが低下している状態では非メンタライジングモード (PM) が高いとされる。子どもの精神状態についての確信 (CMS) については, 高すぎる (押しつけがましき) と, 低すぎる (子どもの精神状態についてほとんど確信がない) の両極を想定し, バランスが取れていることが正常なメンタライジングとされる (Luyten, et al., 2017)。

先行研究では父親と比べ母親の省察機能が高いことが示されており, 母親は父親より子どもの精神状態への興味・関心 (IC), 子どもの精神状態についての確信 (CMS) が高く, 非メンタライジングモード (PM) が低いことを示す研究が多い (Bennett, et al., 2023; Eva, et al., 2023)。このような差については, 母親が自宅で乳児の世話をし, 自分の行動をメンタライジング的に相互形成するための経験と知識をより多く得ている (Salo, et al., 2021) ことを反映していると解釈されている。子どもの年齢については, 幼児期より学童期の子どもを持つ母親のほうが非メンタライジングモード (PM) が高く, 学童期の子どもに対しては, 親が子どもの心や気持ちを読み取るのが難しくなるといった結果がある (Khoshroo, et al., 2022)。子どもが発達し, より幅広い文脈で感情管理スキルを適用することを学ぶにつれて, 子どもの外的表出と内的状態との間の偶発性は少なくなる

(Cole et al., 2018)。そのため、親はある行動が苦痛を示す状況と判断することが難しくなる可能性があり、この考え方に一致するように、親が行動を精神状態に帰属させる精度は子どもの年齢が上がるにつれて低下し、親は子どもの行動の帰属を誤りやすくなる可能性があると考えられる (Bennett, et al., 2023)。親の省察機能と子どもの問題行動との関連においては、母親の省察機能の影響がみられ、母親の非メンタライジングモード (PM) が高く、子どもの精神状態についての確信 (CMS) が低い場合、子どもの外在化・内在化問題が増えるとされる (Khoshroo, et al., 2022)。省察機能の高い親は、子どもの否定的な行動の責任を取ることも、子どもの本当のニーズに焦点を当てることができ、子どもにとって良いタイミングで、分かりやすい表情や声による感情ミラリングを伴う対応 (上地ら, 2022) ができる。こうした養育行動を通して子どもが自身の感情に振り回されずに応じることを学び、自分の情動を制御する方法を身につけることを通じて、問題行動が減少すると考えられている。

一方、親の省察機能の抑うつとの関連について、抑うつの高い母親は、非メンタライジングモード (PM) が高く、子どもの精神状態についての確信 (CMS) が低い、子どもの精神状態への興味・関心 (IC) に関しては影響が見られないといった結果が示されている (Khoshroo, et al., 2022; Krink, et al., 2018)。抑うつは、母親が子どもの精神状態について興味や好奇心を持つ程度を必ずしも変化させるわけではなく、母親の自他を省みる能力を低下させ、その結果、母親が自分自身や子どもに対して偏った認識を持ちやすくなると解釈される。なお、省察機能と親の抑うつとの関連においては、うつ病の重症度に依存することが指摘されており (Khoshroo, et al., 2022; Krink, et al., 2018)、一般的な健康度の親の省察機能と精神的健康との関連については検証が必要である。

3. 本研究の目的

子どもの自律性が高まり言語能力も発達する幼児期は、親は子どもの社会化を促すことが求められる。親は子どもの不従順さに否定的な感情体験をしやすく、統制的な養育行動が多くなる。一方で、子どもの精神状態に関心を向けた省察的な養育行動は、子どもの情動制御の発達を助ける。親の統制的な行動と、子どもに関心を向けた省察的な行動のバランスは日々の養育を通じて一つのスタイルとして形成されていく。学童期になると親は子どもの行動の帰属を誤りやすくなる (Bennett, et al., 2023) のであれば、子どもの行動の帰属が比較的容易な幼児期は、高い省察機能を維持したバランスの良い養育行動が期待される時期であろう。

また、家族システム内では性別に関係なくより高い省察機能を持つ親が、もう一方の親のスキルの欠如による子どもの行動への影響を補い、減衰させることができ (Colonnese, et al., 2019)、父母ともに洞察力がある場合、家族の協力やコペアレンティングがより深まる (Marcu, et al., 2016) とされる。父母子の三者間関係から検討される親の対応は、二者間関係とは異なる子どもや親自身への影響を見いだせる可能性があり、三者間関係に関する研究への期待は高い (Jessee et al., 2018)。国内のコペアレンティングに関する先行研究では、調和的なコペアレンティングを阻む要因として、父親の「母親の気持ちがわかれば自ら応えたい」と、母親の「父親に察してほしいが自ら主張できない」と思いが交錯する状況があり、父母の養育行動においては互いに「察する・気づく」と「言わなければわからないことは話し合う」との双方が大切であること (大島ら,

2022; 加藤・神谷, 2024)が指摘されている。親の省察機能とそれに基づく養育行動にもこうした父母間の思いの交錯があると考えられ、父母個人内に加え、父母個人間の影響を考慮した検討が必要であろう。

養育行動は、日々のやりとりを積み重ねるプロセスの中で構築されていくシステムであり(高濱ら, 2008), 養育行動が与える影響を検討する上では、因果(特に時間的順序性)に関する手がかりを得るため(伊藤, 2022)の縦断研究が有効である。勝山・塩崎(投稿中)において、親の省察機能が親の精神的健康に影響を与えることが示唆されたが、横断的な分析にとどまっている。乳児期の養育を通じて親の省察機能が変化することを捉えた縦断研究(Salo et al., 2021)にあるように、省察機能や養育行動の経時的な個人内変動を踏まえ、その後の影響を捉えることが必要である。親の省察機能に関する縦断研究は国外でも少なく、日本においては養育行動に関する縦断研究自体が非常に少ない。離婚後の葛藤的なコペアレンティングが子どもの外在化問題行動に直接つながることを、交差遅延モデルを用いて経時的に捉えた研究(直原ら, 2023)にあるように、養育研究においてより確からしい因果関係を検証するためには経時的な検討が望ましい。

よって本研究では、幼児期の子どもを育てる親の省察機能と養育行動が、子どもの問題行動や親の精神的健康に与える影響について縦断的に検討することを目的とする。この際、父母のペアデータを用いることで、父母個人内だけではなく父母個人間の影響も検討する。

【目的1】親の省察機能と養育行動が、1年後の子どもの問題行動と親の精神的健康に与える影響について、縦断データを用いて分析する

【目的2】上記の機序において、父母はどのように相互に影響を与え合うのかについて、父母のペアデータを用いて明らかにする

方法

1. 調査協力者と手続

1回目調査は2023年7月に実施した。アイブリッジ株式会社(Freeasy)に登録するモニターのうち、25～45歳の既婚の男女、2～4歳の子どもがいること、登録者と登録者の配偶者の双方が回答可能であることを条件とした。対象年齢に該当する子どもが複数いる場合には、最も年長の子を想定するものとした。データが得られた250組500名のうち、半数以上の設問に同一の番号で回答するなど回答に偏りがある者が含まれる父母のペアを除いた223組446名を調査対象とした。2回目調査は2024年7月に実施した。1回目調査に協力した223組のモニターIDを抽出し同会社を通じて調査依頼した。父母ペアデータが得られた125組250名のうち、1回目と同様の手続を行い103組206名を調査対象とした(有効回答率46.2%)。

2. 調査項目

＜親の省察機能＞日本語版 PRFQ を用いた。Luyten et al. (2017) の許可を得て松尾他(未発表)が翻訳し、信頼性・妥当性が検証されている。①非メンタライジングモード(PM)6項目;項目例「私の子どもがうるさくするときは、ただ私をいら立たせようとしているだけだ」、②子どもの精神状態についての確信(CMS)6項目;項目例「私は子どもの心を完璧に読むことができる」、③子どもの精神状態への興味・関心(IC)6項目;項目例「私はよく、子どもがどう感じている

のか興味を持つ」の計 18 項目で構成されている（7 件法）。1 回目調査（N=446）で確認的因子分析を行い、標準化推定値が .40 を下回った 2 項目（CMS「私は時々子どもの反応を誤解することがある；逆転項目」、IC「私は子どもが何を感じているか推測しても意味がないと思う；逆転項目」）を除外した。16 項目で再度分析を行ったところ、原著と同じ 3 因子構造が確認され、許容できる適合度、十分な信頼性を示した（ $\chi^2(98) = 310.40$, CFI=.905, RMSEA=.071）。2 回目の調査では、1 回目の調査の確認的因子分析で採用された 16 項目に関して信頼性係数を算出したところ十分な値を示したため、1 回目・2 回目ともにこの 16 項目を採用した。本研究の調査対象（N = 206）に関する 1 回目（T1）・2 回目（T2）の信頼性係数は、PM（T1; α =.779, T2; α =.827）、CMS（T1; α =.773, T2; α =.772）、IC（T1; α =.772, T2; α =.803）であった。

<養育行動>日本語版 Coping with Toddlers' Negative Emotion Scale（Spinrad, et. Al., 2004）（以下 CTNES）を用いた。1 歳半～3 歳頃の子どもの様々なネガティブ感情を感じている場面（12 場面）における、親の対応に関する尺度であり、安藤（2017）が翻訳し、信頼性・妥当性が検証されている。本研究では、子どもの主張と親の期待や意図が反し、子どもが反抗・自己主張を示す際の養育行動に焦点を当てるため、全 12 場面のうちの 4 場面を用いた（7 件法）。場面と養育行動（7 つの対応）の一例を Table1 に示す。近似した反応を要約して表現するため、日本の先行研究（鹿島, 2020）を参考に 1 回目の調査（N = 446）にて 7 対応に関する因子分析を実施した（最尤法・バリマックス回転）結果、2 因子構造が確認された。第 1 因子は、最小化・罰・困惑・感情表出・要求通であった。親自身の判断で用いやすい対応であることから「親主導的対応」と命名した。第 2 因子は、感情焦点・問題焦点であった。子どもの反応や意見を取り入れ一緒に解決を試みようとする対応であることから「親子相互的対応」と命名し、親主導的対応得点・親子相互的対応得点を算出した。本研究の調査対象（N=206）に関する 1 回目（T1）・2 回目（T2）の信頼性係数は、親主導的対応（T1; α =.885, T2; α =.913）、親子相互的対応（T1; α =.851, T2; α =.855）であった。

Table1 ; CTNES(Coping with Toddlers' Negative Emotions Scale)の 7 つの対応
問題文：「もし子どもが菓子を欲しいのに、私が許可しないので怒り出したら私は：」

本研究での分類	対応	選択肢の文章
親主導的対応	苦痛	子どもの行動に怒りを感じる
	罰	子どもに「そんなに怒っているなら明日もお菓子をあげないよ」と言う
	最小化	子どもに「不機嫌になるのはおかしい」と言う
	要求通	子どもの欲しがっているお菓子を渡す
	感情表出	子どもに「怒った気持ちになるよね」と言う
親子相互的対応	感情焦点	子どもと他のおもちゃやゲームで遊んで、気をまぎらわす
	問題焦点	ご飯の前に食べてよいものを、子どもと一緒に考える

<子どもの問題行動>子どもの強さと困難さアンケート Strengths and Difficulties Questionnaire（SDQ）の 2～4 歳の親用尺度の日本語版（25 項目・3 件法）を用いた。下位尺度である多動 / 不注意、情緒、行為、仲間関係（20 項目）の合成得点を算出し、子の問題行動得点とした。本研究では、2 回目のデータのみ分析に用いた。信頼性係数は α =.839 であった。

＜親の精神的健康（抑うつ）＞1週間におけるからだや心の状態について尋ねる抑うつ尺度である The Center for Epidemiology Studies Depression Scale（CES-D）の日本語版（20項目・4件法）を用いた。本研究では、2回目のデータのみ分析に用いた。信頼性係数は $\alpha=.910$ であった。

3. 分析方法

父母個人間の影響の把握には、行為者－パートナー相互依存性モデル（Actor-Partner Interdependence Model; 以下 APIM）を用いた。APIMは、個人内の影響プロセスを表す Actor 効果と、個人間の影響プロセスを表す Partner 効果を識別し、その関連を分析することが可能であり、二者間の相互依存性の検討に適した方法である（清水, 2014）。基礎的な分析には、IBM SPSS Statistics28, APIMに関する分析には AMOS28 を用いて、構造方程式モデリングによる分析を行った。

4. 倫理的配慮

アンケートフォーム冒頭に、研究の目的、所要時間、内容の取扱い（統計的処理を行い個人が特定され得ないようにすること）、中断が可能であることを記載した。父母のフォームは2度に分けて配信し、配偶者には内容が共有され得ないことを記載した。インターネット調査はアカウントでパスワード管理がされており、入力1回目・2回目いずれにおいても各世帯同一アカウントから各配信1回に制限された。協力者はIDで管理され、調査者は協力者個人が特定できないため、匿名性は担保されている。

結果

1. 対象者の属性

1回目調査時点の、親の平均年齢は父親36.21歳（SD = 5.31）、母親34.57歳（SD=5.22）、対象児（103名）の平均月齢は39.37ヵ月（SD = 11.35）、2歳児; 46名、3歳児; 27名、4歳児; 30名であった。対象児の性別は男児60名、女児43名であり、出生順は第一子（一人っ子）; 42名、第一子（下にきょうだいあり）; 24名、第二子以降（上にきょうだいあり）; 37名であった。

2. 各変数の級内相関

父母間の級内相関を Table2 に示す。いずれの変数にも父母間に高い級内相関が確認されたことから、父母のデータを APIM で分析する妥当性が確認された。

Table2 ; 各変数の内的整合性および父母間の級内相関(N = 206)

変数	級内相関	95%下限	95%上限	変数	級内相関	95%下限	95%上限
PM（非メンタライジング）	.655	.526	.753	PM（非メンタライジング）	.747	.648	.821
CMS（確信）	.589	.446	.702	CMS（確信）	.580	.437	.695
T1 IC（興味・関心）	.492	.328	.627	IC（興味・関心）	.461	.295	.600
親主導的対応	.712	.602	.795	T2 親主導的対応	.757	.661	.829
親子相互的対応	.606	.468	.715	親子相互的対応	.624	.490	.729
				子の問題行動	.751	.653	.824
				抑うつ	.759	.664	.830

3. 親の省察機能と養育行動の経時的変化

親の省察機能と養育行動に関して、1回目(T1)・2回目(T2)の2時点での平均を比較するため、2要因分散分析を行った。結果をTable3に示す。IC(興味・関心)に関して、2時点間の単純主効果がみられ、2回目に比べ1回目のIC(興味・関心)が有意に高い傾向が認められた。いずれの変数についても、交互作用は見られなかった。

Table3; 父親・母親における省察機能と養育行動の経時的変化(T1・T2)

	父(N=103)				母(N=103)				主効果	交互作用
	T1		T2		T1		T2			
	M	標準誤差	M	標準誤差	M	標準誤差	M	標準誤差		
PM（非メンタライジング）	3.59	0.11	3.48	0.11	3.66	0.11	3.58	0.11	—	—
CMS（確信）	3.85	0.09	3.81	0.09	4.13	0.10	4.02	0.09	母>父 **	—
IC（興味・関心）	4.31	0.09	4.18	0.09	4.64	0.09	4.46	0.09	T1>T2 †	—
親主導の対応	3.61	0.09	3.57	0.09	3.72	0.09	3.64	0.09	—	—
親子相互の対応	4.54	0.09	4.36	0.09	4.67	0.09	4.58	0.09	母>父 †	—
** p< .01 * p< .05 † p< .10										

** p<.01 * p<.05 † p<.10

4. 父母における各変数の相関係数

父親・母親における各変数の平均・標準偏差と変数間の相関係数をTable4に示す。

Table4; 父親・母親における各変数の平均・標準偏差および変数間の相関係数

	父親(N=103)		母親(N=103)		PM	CMS	IC	親主導的	親子相互的	子の問題行動	抑うつ
	M	SD	M	SD							
PM (非メンタライジング)	3.59	1.10	3.66	1.03	-	.477 **	.052	.750 **	-.125	.404 **	.472 **
CMS (確信)	3.85	1.01	4.13	0.89	.484 **	-	.406 **	.463 **	.233 *	.119	.152
IC (興味・関心)	4.31	0.96	4.64	0.85	.075	.533 **	-	.047	.658 **	-.164	-.143
親主導的対応	3.61	0.90	3.72	0.86	.780 **	.482 **	.096	-	.072	.353 **	.369 **
親子相互的対応	4.54	1.02	4.67	0.92	-.096	.248 *	.640 **	.155	-	-.226 *	-.293 **
子の問題行動	1.73	0.35	1.71	0.35	.533 **	.305 **	-.052	.515 **	-.033	-	.598 **
抑うつ	1.95	0.58	1.92	0.58	.444 **	.302 **	-.130	.521 **	-.055	.619 **	-

相関行列の下三角部分(灰色)が父親、上三角部分(白色)に母親の相関係数が示されている

省察機能・養育行動については1回目(T1)、子の問題行動・抑うつについては2回目(T2)の値

** p<.01, * p<.05, + p<.10

父母ともにPM(非メンタライジング)と親主導行動的対応の間に強い正の相関、IC(興味・関心)と親子相互的対応の間、子どもの問題行動と抑うつの間に正の相関がみられた。PM(非メンタライジング)と子どもの問題行動や抑うつの間には父母ともに正の相関がみられ、CMS(確信)と子どもの問題行動や抑うつの間には父親に弱い正の相関がみられたが、母親にはみられなかった。親主導的対応と子どもの問題行動や抑うつの間には父母ともに正の相関がみられた。IC(興味・関心)と親子相互的対応に関しては、子どもの問題行動や抑うつとの間に有意な相関は見られなかった。

5. 親の省察機能と養育行動が、1年後の子どもの問題行動と親の精神的健康に及ぼす影響

親の省察機能と養育行動が、1年後の子どもの問題行動と親の精神的健康(抑うつ)に及ぼす影響を検討するため、APIMを用いて父母間の影響を考慮し構造方程式モデリングによる分析を行った。父母間には級内相関が認められたため、各要因の父母間には共分散を想定した。省察機

能, 養育行動を独立変数, 子どもの問題行動, 抑うつを従属変数として分析した結果, 全ての変数を含むパス図は適合度が高くなかった。そこで, 独立変数と従属変数をそれぞれ対応させ (①省察機能—子どもの問題行動, ②養育行動—子どもの問題行動, ③省察機能—抑うつ, ④養育行動—抑うつ) 分析したところ, いずれのパスも適合度が高かった (① $\chi^2(28)=348.919$, CFI=1.000, RMSEA=.000 ② $\chi^2(15)=274.340$, CFI=1.000, RMSEA=.000 ③ $\chi^2(28)=365.879$, CFI=1.000, RMSEA=.000 ④ $\chi^2(15)=287.089$, CFI=1.000, RMSEA=.000) ため, これらのモデルを採用した。子どもの問題行動を従属変数とする①②のパスを Figure1, 親の抑うつを従属変数とする③④のパスを Figure2 に示す。

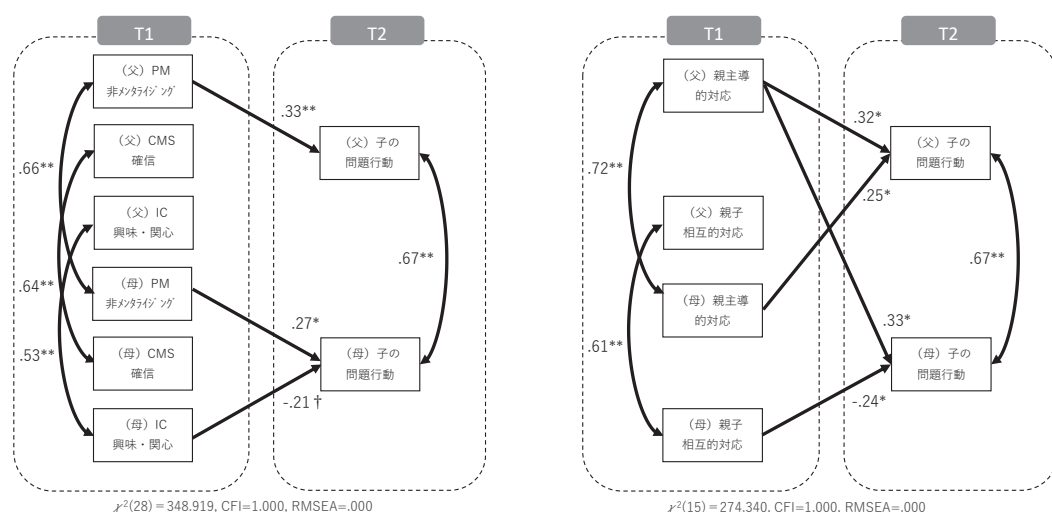


Figure1 親の省察機能・養育行動が1年後の子の問題行動(認識)に与える影響 (APIMによる検討)

† p<.10 * p<.05 ** p<.01

図内の数値は、標準化パス係数および級内共分散

N=206 (父103,母103)

APIMでは, 二者の個人内の影響プロセスをActor効果とし, 二者の個人間の影響プロセスをPartner効果とする。Figure1に関して, 親の省察機能からの影響について, 父親のPM(非メンタライジング)から父親自身が認識した子どもの問題行動へのActor効果が確認された。また, 母親のPM(非メンタライジング)とIC(興味・関心)から母親自身が認識した子どもの問題行動へのActor効果が確認された。親の養育行動からの影響について, 父親の親主導的対応から父親自身が認識した子どもの問題行動, 母親の親子相互的対応から母親自身が認識した子どもの問題行動へのActor効果が確認された。また, 父親の親主導的対応から母親が認識した子どもの問題行動, 母親の親主導的対応から父親が認識した子どもの問題行動へのPartner効果がそれぞれ確認された。

Figure2に関して, 親の省察機能からの影響について, 父親のCMS(確信)から父親自身の抑うつへのActor効果, 母親の抑うつへのPartner効果が確認された。母親のPM(非メンタライジング)から母親自身の抑うつへのActor効果, 父親の抑うつへのPartner効果が確認された。また, 母親のIC(興味・関心)から父親の抑うつへのPartner効果が確認された。親の養育行動からの影響について, 父親の親主導的対応から父親自身の抑うつへのActor効果が確認された。母親の親主導的対応と親子相互的対応からはいずれも, 母親自身の抑うつへのActor効果に加え, 父親の抑うつへのPartner効果が確認された。

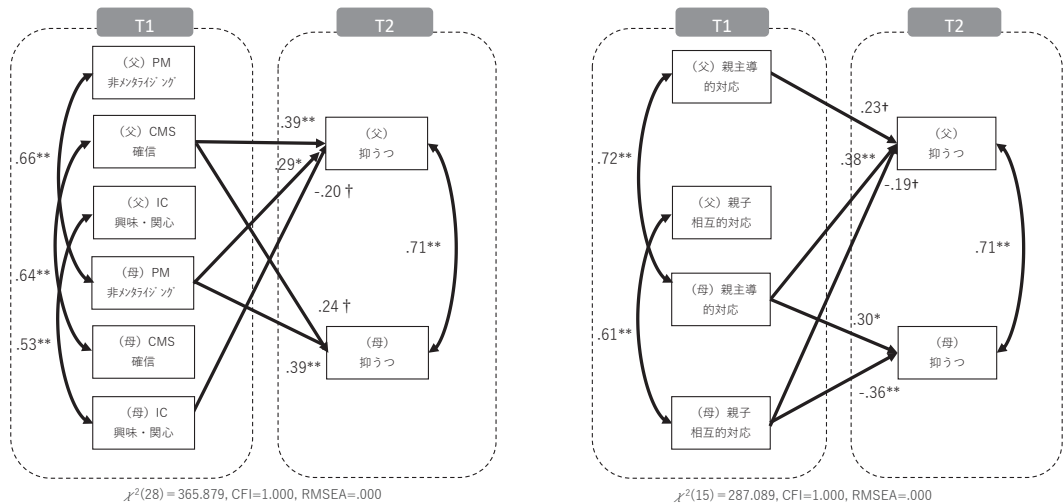


Figure2 親の省察機能・養育行動が1年後の親の抑うつに与える影響 (APIMによる検討)

† p<.10 * p<.05 ** p<.01

図内の数値は、標準化パス係数および級内共分散

N=206 (父103,母103)

6. 父母の組み合わせによる、1年後の子どもの問題行動と親の精神的健康への影響

親の省察機能と養育行動が及ぼす影響には相違があることが示唆された。そこで、親の省察機能や養育行動を父母ペアで捉えると1年後の子どもの問題行動と親の抑うつにどのような違いがみられるのかを調べるために、父母の組み合わせを類型化する目的で親の省察機能と養育行動の下位尺度得点を用いたクラスター分析 (Word法) を行った。3クラスター解と4クラスター解を算出し、各クラスターに含まれる人数や解釈可能性を考慮し3クラスター解を採用した。結果をFigure3に示す。

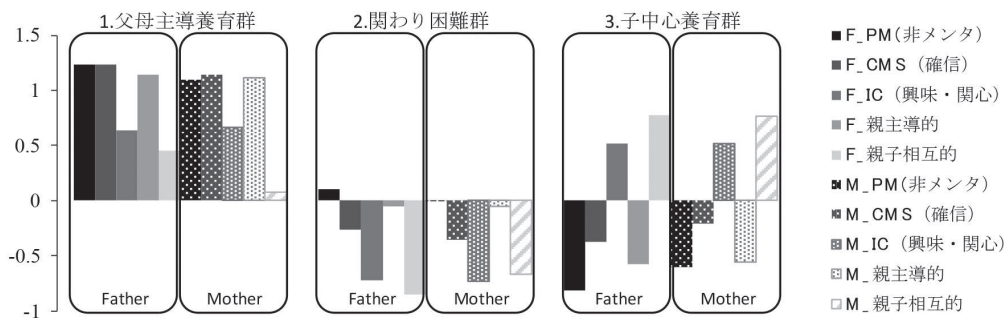


Figure3 親の省察機能・養育行動の組み合わせによるクラスター分析結果

第1クラスターは他の2つの群と比較しPM(非メンタライジング)やCMS(興味・関心), 親主導的対応の高さが顕著であることから、養育における否定的な解釈や対応、過度な干渉がみられる群であると捉え「父母主導養育群」と命名した。第2クラスターは、PM(非メンタライジング)や親主導的対応は平均的であるものの、IC(興味・関心)や親子相互的対応が低く、子どもの発達に応じて養育対応を変化させていくことが難しい群と捉え「関わり困難群」と命名した。第3クラスターは、PM(非メンタライジング)や親主導的対応が低く、IC(興味・関心)や親子相互的対応が高

く、高い省察機能を持ち合わせ子どもの視点に立った対応ができる群であると捉え「子中心養育群」と命名した。3クラスターはいずれも、父母間の省察機能と養育行動は似た傾向にあり、父母の省察機能と養育行動が異なるタイプのクラスターは抽出されなかった。

抽出されたクラスター3群を用いて、1年後の子どもの問題行動と親の精神的健康との関連を検討するために、3群を独立変数、1年後の子どもの問題行動と抑うつを従属変数とする1要因分散分析を行った。その結果、いずれも群間の得点差が有意であった ($F(2, 91)=16.975, 13.383, 13.972, 10.346, p<.001, p<.001, p<.001, p<.001$) ため、Holm法による多重比較を行った。結果をTable5に示す。

Table5；父母の省察機能・養育行動の組み合わせを用いた一要因分散分析の結果

		1.父母主導養育群 N=22		2.関わり困難群 N=44		3.子中心養育群 N=37		F値	多重比較
		M	標準誤差	M	標準誤差	M	標準誤差		
父親	子の問題行動	1.97	0.07	1.81	0.05	1.52	0.05	16.975 **	1,2>3
	抑うつ	2.39	0.12	2.02	0.08	1.64	0.09	13.383 **	1>2>3
母親	子の問題行動	1.98	0.07	1.77	0.05	1.53	0.05	13.972 **	1>2>3
	抑うつ	2.33	0.12	1.95	0.08	1.65	0.09	10.346 **	1>2>3

父親が認識した子どもの問題行動については、子中心養育群と比較し、父母主導養育群、関わり困難群は有意に高かった。父親の抑うつ、母親が認識した子どもの問題行動、母親の抑うつについてはいずれも、父母主導養育群は関わり困難群、子中心養育群と比較し有意に高く、関わり困難群は子中心養育群と比較し有意に高かった。

考察

本研究の目的は、第一に親の省察機能と養育行動が1年後の子どもの問題行動と親の精神的健康にどのような影響を与えるのかについて、縦断データを用いて分析することであった。第二に、父母ペアデータを用いることにより、こうした機序において父母はどのように相互に影響を与え合うのかについて明らかにすることであった。

1. 親の省察機能と養育行動の縦断的变化

親の省察機能と養育行動に関して、T1とT2の縦断的な変化は親の省察機能のIC(興味・関心)においてわずかに低下がみられたのみであった。本研究では2～4歳から3～5歳の1年間の変化を検討したが、父母の省察機能と養育行動は大きく変化していないことが明らかになった。父母のIC(興味・関心)の低下がみられたことは、言語発達により子どもの主張が捉えやすくなることや、子どもが一人でできることが増え、親が子どもの精神状態に関心を持つ必要が減少したことが考えられる。加えて、仕事と子育てのウェイトを変化させる、対象児より下の子のほうが幼く手がかかるといった、親子を取り巻く生活環境の変化から、親の興味・関心が他の環境要因に分散された影響も考えられる。一方で養育行動にはT1とT2で差がみられなかった。これには、高濱ら(2008)にあるように、親の養育行動の変化は、親が自覚的に行動を変えるよりは、子どもの発達が先行し統制的な養育行動の必要が少なくなる(頻度が減る)ことであるため、個人内の養育行

動は子どもの発達に促され緩やかに変化していくことが考えられる。但し本研究は2回目調査(3～5歳)でも1歳半～3歳用のCTNESを使用したため、以前生じていた不従順場面として回顧的に回答した可能性もある。CTNESの就学前～小学校低学年版であるCCNES(Coping with Children's Negative Emotions Scale)を用いて3歳児の親の養育行動の3年間の縦断的变化を分析した鹿島(2013)では、養育行動の因子のうち苦痛得点が3年目(5-6歳児)で高く、感情表出得点が2年目(4-5歳児)で低いといった、親の養育行動の個人内変化が見いだされている。親の養育行動を縦断で分析する際に、CTNESとCCNESのような共通した因子の尺度を併用するなど、子どもの年齢に応じた測定方法を検討する必要がある。更に本調査では、裏付けとなるデータ数が少ないこともあり、今後データを増やし、養育行動は子どもの発達の影響を受けながらどの時期にどのくらいの時間をかけて変化するのか、子どもの特性や父母の関わりの違いなどによって変化が異なるのかなどを検討する必要がある。

2. 親の省察機能と養育行動が1年後の子どもの問題行動と親の精神的健康に与える影響

APIMを用いた父母の相互影響に関する交差遅延モデルでの検討の結果、Actor効果だけではなくPartner効果が確認された。これにより、父母の省察機能と養育行動は、1年後の子どもの問題行動と父母の精神的健康に相互に影響を与え合うことが示された。

Figure1の子どもの問題行動への影響に関して、省察機能はActor効果のみであり、養育行動はActor効果に加えPartner効果が確認された。子の問題行動に関して本研究で用いた尺度は親の自己評価式であり、客観的に捉えられる子どもの問題行動ではない。すなわち父母それぞれが“認識した”子の問題行動であり、親の省察機能と親が認識する子どもの問題行動は互いに親の認知要因と解釈できる。こうした認知要因においては個人内のみに影響を与えた。一方で養育行動は父母が互いの対応と、それに対する子どもの反応を実際に見ることを通して、子どもの問題行動の認識に影響を与えたと解釈できる。また、PM(非メンタライジング)の高い父母は、子どもの行動をネガティブに意味づけ続けることで、自身の1年後の子どもの問題行動認識を高める。IC(興味・関心)が高い母親は、子どもの発達に応じた変化に興味・関心を持ち続け、それまでの変化から問題行動が減っていると捉えたり、同年齢の子どもにはよくあることだとし子どもの行動を“問題”と捉えないといった母親の認識の変容に繋がっているとも解釈できる。親の自己評価であるという課題は残るが、一方で親の省察機能が、親の子どもの問題行動の認識に影響を与えることが示されたことは興味深い結果であった。縦断的に見て親の省察機能はIC(興味・関心)の低下がわずかに見られたのみであったが、そのような中で親の省察機能の高さは、同じ現象でも受けとめ方を変える親の認識の変化(高濱ら, 2008)に繋がると考えられる。本研究における縦断的な分析を通して、子どもの問題行動に対する親の認識変容のプロセスが示唆された。

Figure2の親の抑うつへの影響に関しては、親の省察機能・養育行動ともにActor効果に加えPartner効果も確認された。養育行動に関しては母親の影響が大きく、母親の親主導的対応、親子相互的対応から父母双方の抑うつへの影響が確認された。横断的な分析を行った勝山・塩崎(投稿中)では、母親の養育行動は父母の子どもの問題行動認識や父母の抑うつに影響を与えておらず、これは母親が父親に比べ子どもの反抗・自己主張場面に頻度高く対峙するため、周囲の状況や子どもの反応によりその都度養育行動が変わり、一度の養育行動からの影響が見られなかった

のではないかと考察された。一方で縦断的な分析を行った本研究において、母親の養育行動が父母の子どもの問題行動認識や父母の抑うつに影響を与えていたことは、母親の日々の養育行動の積み重ねが経時的に父母の子どもの問題行動認識や父母の抑うつに影響を及ぼしたと解釈できる。

親の省察機能に関しては、Figure1でもActor効果が見られたPM(非メンタライジング⁶)やIC(興味・関心)からの影響だけではなく、父親のCMS(確信)から父親自身と母親の双方の抑うつへの影響が確認された。親の省察機能に関して、CMS(確信)の高さが抑うつを高めることは、これまでの先行研究から想定しえない結果であった。Luyten, et al. (2017)によれば、メンタライジングが高いことは精神状態の不透明さを認識していることである。子どもの精神状態について過度に確信する傾向(CMSが高過ぎる)は、子どもの内的主観世界に入ることを妨げ、自身の感情体験と子どもの感情体験を混同する可能性があると考えられる(Luyten, et al., 2017)。本研究においてCMS(確信)は父親に比べ母親が高く、これは先行研究と同様の結果である。母親のCMS(確信)の高さは、Salo, et al. (2021)が指摘するように、母親が父親より乳児の世話をし、自分の行動をメンタライジング的に相互形成するための経験と知識をより多く得ているためと考えられる。一方で父親のCMS(確信)の高さが父親自身の抑うつを高めていたことは、CMSの捉える“子どもの精神状態への確信”が、経験に裏付けされた実態を伴ったものであるかどうかを反映するのではないかと。内閣府(2018)に示されるように、日本の養育においては諸外国と比較しても未だ父親の関与が少なく母親の関与が中心である。子どもへの関与が少ない中で子どもの精神状態を過度に確信することは、省察により自身の行動を修正する機会を減らすため、子どもの反応に適切に応じることには繋がらない。結果として子どもの問題行動が減らない場合、父親は適切に関わっている感覚がつかめず、父親自身の抑うつを高めるのではないだろうか。

また、父親のCMS(確信)の高さは母親の抑うつも高めていた。これは、上述のとおり父親が子どもの反応に適切に応じられていない状態に母親が抑うつを高めた可能性に加え、父親の「子どものことをわかっている」という確信的な省察を母親がネガティブに認識したことで、母親が抑うつを高めた可能性も考えられる。主要な育児担当者が母親である日本では、父親の子どもや母親を含めた場のニーズを感受し自ら応答的に関与しようとする姿勢が高いと母親が認知することが、調和的なコペアレンティングの鍵になる(加藤・神谷, 2024)といった、父親の養育に対する母親の認知に注目する研究がみられる。本研究における父親の省察機能から母親の抑うつへの影響が、母親のどのような認知を介するものであるかについては更なる検証が必要である。育児中の父母の精神的健康には様々な要因が影響を及ぼすと考えられるが、父母の省察機能のような認知的側面が及ぼす影響について、本研究では貴重な示唆が得られたと言えよう。

3. 親の省察機能と養育行動による父母ペアの抽出

クラスター分析の結果からは、父母それぞれが同じ特徴を持ち合わせた父母のペアが抽出され、父母ともに子ども中心の養育をするペアほど、親が認識した子どもの問題行動は少なく、親の精神的健康は高いことが示された。父母間の級内相関は非常に高く、父母は子どもの誕生以前から似通った省察機能を持ち合わせていた可能性と合わせ、共に養育をする中で、相手の養育から影響を受け、今のような親の省察機能や養育行動に変化した可能性も考えられる。性別に関係

なくより高い省察機能を持つ親が、もう一方の親のスキルの欠如による子どもの行動への影響を補い、減衰させることができる (Colonnese, et al., 2019) という先行研究は、父母がペアになることで子どもの養育を強固に確立していくことの可能性を示唆している。この点を明らかにするためには、子どもの誕生以前からの縦断研究を行うことや、父母の省察機能や養育行動の特徴が異なるペアについてクラスターを抽出し、その特徴を見いだすといった更なる検証が必要である。

4. まとめと本研究の課題

本研究からは以下の2つの示唆に富んだ結果が得られた。1つ目に、養育行動とその背景にある親の省察機能の間には相関がみられるものの、子どもの問題行動の認識と親の精神的健康のそれぞれに与える影響は異なるという結果である。養育行動は父母が互いの行動を直接確認できるため、子どもの問題行動の認識にも精神的健康にも、自身だけではなくパートナーからの影響も受けやすい。一方で、養育行動の背景にある省察機能は父母が直接的には確認できないため影響は限定されるが、親の精神的健康は、自身の省察機能だけではなくパートナーの省察機能からの影響も受ける。縦断データを用いることで、父母の省察機能や養育行動が経時的に自身に影響を与え、同時にパートナーにも影響を与える過程が確認された。

2つ目に、父親の子どもの精神状態を過度に確信する傾向が父親自身と母親の抑うつを高めるという先行研究から想定しえなかった結果である。子どもの精神状態を過度に確信する傾向とはどのようなものか。近い概念として親の侵入性があり、Luyten, et al. (2017) では、母親の省察機能のうちのIC(興味・関心)が高いほど母親の侵入性が高いことが見いだされているが、CMS(確信)との関連は見いだされず、父親の省察機能と侵入性の間にはいずれにも関連が見出されていない。親の省察機能の「子どもの精神状態について過度に確信する傾向」という特徴については、更なる検証が望まれる。

本研究の課題として、離脱の影響もあり分析可能な父母ペアのサンプルが少なかった点が挙げられる。サンプル数が少なかったため、データの信頼性が低いことも課題である。本研究で得られた結果の確証のためにも、より大きなサンプルにより同様の方法を用いて再検証することが期待される。

謝辞

本研究の調査にご協力くださいましたお父様・お母様に心より御礼申し上げます。また、分析、執筆にあたりご指導、ご助言をくださいました塩崎尚美先生、意見をくださいました氷室綾さんに深く感謝申し上げます。

文献

- 安藤智子 (2017). 両親の抑うつと小学校低学年時の適応に関する検討. 科学研究費助成事業研究報告書 (2024年8月16日閲覧)
- Bennett, C., Regan, D., Dunsmore, J. C., King, G., & Westrupp, E. M. (2023). Social and Emotional Determinants of Parental Reflective Functioning in a Multinational Sample. *Journal of Family Psychology*, 37, (6), 818–829.
- Cole, P. M., Loughheed, J. P., & Ram, N. (2018). The development of emotion regulation in early childhood: A matter of multiple time scales. *Emotion regulation*, Routledge.

- Colonnese, C., Zeegers, M. A. J., Majdandžic, M., van Steensel, F. J. A., & Bögels, S. M. (2019). Fathers' and mothers' early mind-mindedness predicts social competence and behavior problems in childhood. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 47, 1421-1435.
- Ensink, K., Normandin, L., Plamondon, A., Berthelot, N., & Fonagy, P. (2016). Intergenerational pathways from reflective function to infant attachment through parenting. *Canadian Journal of Behavioral Science*, 48(1), 9-18.
- Eva, B. M., Mente, S. V., Ida, E., Marianne, T. K., Tina, W. H., Marleen, H. M. de Moor, & Karen-Inge, K. (2023). Parental Reflective Functioning in First-Time Parents and Associations with Infant Socioemotional Development. *Journal of Child and Family Studies*, 32, 2140-2152.
- Fonagy, P., & Target, M. (1997). Attachment and Reflective function: Their role in self-organization. *Development and Psychopathology*, 9, 679-700.
- 伊藤大幸 (2022). 発達研究における縦断的アプローチの役割と方法論: What, Why and How?. 発達心理学研究, 33(4), 176-192.
- Jessee, A., Mangelsdorf, S. C., Wong, M. S., Schoppe-Sullivan, S. J., Shigeto, A., & Brown, G. L. (2018). The Role of Reflective Functioning in Predicting Marital and Coparenting Quality. *Journal of Child and Family Studies*, 27(1), 187-197.
- 直原康光・安藤智子・菅原ますみ (2023). 離婚後の父母コペアレンティングと子どもの適応の相互関係—交差遅延効果モデルによる検討—. 教育心理学研究, 71(2), 117-130.
- 鹿島なつめ (2013). 子どもの否定的感情に対する養育者の関わりと採用するしつけ方略との関連—3年間の縦断的調査より—. 西南学院大学人間科学論集, 9(1), 31-45.
- 鹿島なつめ (2020). 幼児期後期の否定的感情制御と養育者の否定的感情への反応 Child Behavior Checklist (CBCL) による問題行動の縦断的検討. 教育心理学研究, 68, 266-278.
- 勝山幸・塩崎尚美 (投稿中). 幼児の反抗・自己主張場面における、父母の精神的健康に影響を与える要因: 父母ベアデータを用いた検討
- 加藤道代・神谷哲司 (2024). 母親の認知する父親の感応性協働性尺度の作成: コペアレンティングにおいて母親が父親に対して抱く「察してほしい」思いに着目して. 発達心理学研究, 35(1), 26-38.
- 上地 雄一郎・西村馨 (監訳), 石谷真一・菊池裕 義・渡部京太 (訳) (2021). メンタライジングによる子どもと親への支援: 時間制限式MBTのガイド, 北大路書房
- Khoshroo, S., Mousavi, P. S. S. (2022). Parental Reflective Functioning as a Moderator for the Relationship Between Maternal Depression and Child Internalizing and Externalizing Problems. *Child Psychiatry & Human Development*, 53, 1319-1329.
- Krink, S., Muehlhan, C., Luyten, P., Romer, G., Ramsauer, B. (2018). Parental reflective functioning affects sensitivity to distress in mothers with postpartum depression. *Journal of Child and Family Studies*, 27(5):1671-1681.
- Luyten, P., Mayes, L.C., Nijssens, L., & Fonagy, P. (2017). The Parental Reflective Functioning Questionnaire. Development and preliminary Validation, *PLOS ONE*, 12(5), 1-28.
- Luyten, P., Campbell, C., Allison, E. & Fonagy, P. (2020). The Mentalizing approach to psychopathology: State of the art and future directions. *Annual Review of Clinical Psychology*, 16, 297-325.
- Marcu, I., Oppenheim, D., & Koren-Karie, N. (2016). Parental insightfulness is associated with cooperative interactions in families with toddlers. *Journal of Family Psychology*, 30, 927-934.
- 内閣府 (2018) 男女共同参画白書 平成30年度版「6歳未満の子供を持つ夫婦の家事・育児関連時間 (1日当たり, 国際比較)」, 内閣府 男女共同参画局 (2024年8月16日閲覧)
- 大島聖美・鈴木佳奈・西村太志 (2022). 夫婦が親チームとなっていくプロセス: 乳幼児の子どもを持つ夫婦を対象とした質的研究. 発達心理学研究, 33, 25-39.
- Salo, S. J., Pajulo, M., Vinzce, L., Raittila, S., Sourander, J., & Kalland, M. (2021). Parent Relationship Satisfaction and Reflective Functioning as Predictors of Emotional Availability and Infant Behavior. *Journal of Child and Family Studies*, 30, 1214-1228.

- Spinrad, T., Eisenberg, N., Kupfer, A., Gaertner, B., & Michalik, N. (2004). The coping with negative emotions scale : Paper presented at the International Conference for Infant Studies; *Chicago. May*.
- Suchman, N. E., DeCoste, C., Leigh, D., & Borelli, J. (2010). Reflective functioning in mothers with drug use disorders: Implications for dyadic interactions with infants and toddlers. *Attachment & Human Development*, 12, 567-585.
- 高濱裕子・渡辺利子・坂上裕子・高辻千恵・野沢祥子. (2008). 歩行開始期における親子システムの変容プロセス; 母親のもつ枠組みと子どもの反抗・自己主張との関係. *発達心理学研究*, 19(2), 121-131.
- Trevarthen, C., Aitken, K. J., Vandekerckove, M., Delafield-Butt, J., & Nagy, E. (2006). Collaborative regulation of vitality in early childhood; Stress in intimate relationships and postnatal psychopathology. *Developmental psychology*, 2, 65-126.